
NEVER&NEVER ~ 永遠と永遠 ~

風蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NEVER&NEVER〜永遠と永遠〜

【Nコード】

N4911Y

【作者名】

風蒼

【あらすじ】

大道克己が風都を襲撃する前。まだ仲間を集めていた頃。彼は、一人の青年を仲間にした。青年の名前は芦原賢。彼は、記憶喪失だった。

これは、もし仮面ライダーエターナルの芦原賢と、ボウケンジャーの高丘映土が同一人物だったらの話です。

新しい仲間（前書き）

これは、もし仮面ライダーエターナルの芦原賢とボウケンジャ
ーの高丘映土が同一人物だったら面白いかなと思いかきました。

新しい仲間

「死神の世界へようこそ」

彼が目を開けると、そんな言葉と共に一人の青年が目に入った。近くには白衣を着た女性もいる。

「ここは、どこだ？俺は何故、こんなところにいる。」

「どうした、まだ寝ぼけているのか？」

「ここは？お前は一体……」

男は近づくと、おおげさに手を広げ芝居がかったように言った。

「俺は大道克己。ここは俺達Neverのアジトだ」

「Never?」

「Necro-Over、略してNeverよ」

今まで黙っていた女性が、説明をした。

「Neverは、一度死んだ人間に科学薬品とクローニング技術を施し蘇らせる。けど、この細胞維持酵素を定期的に打たないと体は崩壊し死に至る。私はプロフェッサー・マリア。あなた達Neverの生みの親よ。」

「死んだ？俺は死んだのか？」

彼の問いに、彼女は目を少し伏せ頷いた。

「そうか」

そう言っつて、溜息を吐くと彼はまた眼を閉じた。

どうして死んだのかはわからないが、別にいい。だが、俺はこれからどうするべきか。

「俺は、何をすればいい？」

「お前、面白い奴だな」

「?????」

何が面白いのか、克己は笑い出したが彼は不思議そうに首を傾げた。

「まあいい。それで、お前の名前は何か？」

「名前？俺の名前」

「俺は、誰だ？」

また、新しい仲間を拾った。

今回は、俺が目を付けていたわけじゃない。そいつを見つけたのは、偶々だった。

その夜はなかなか寝付けず、気分を変えようと散歩に出ると雨が降ってきやがった。

近くのビルで雨宿りをしていると、突然ヘリが屋上に墜落。ついで銃撃音。行ってみると、フェンスに寄り掛かるようにして死んでいる青年。その青年にやられたのだろう、数人の男たち。どれも一発で胸を打たれていた。

それを見つけたとき、面白いと思った。知らない奴だったが、こいつは絶対に仲間にする。ほとんど直感的にそう思った。

こいつを連れ帰った俺を見て、おふくろは驚いたようだったが Never にするようになると、何も聞かずにやってくれた。

目が覚めたこいつは、ぼーとしているようだった。

当たり前だ、今まで死んでいたんだからな。

俺達が、Never について説明すると驚くでもなく淡々と事実を受け止めてそれについては質問もせず、何をすればいいと聞いてきた。

普通なら驚くか、怒りだし混乱するところをだ。

本当に面白い。だが、名前を聞いた時のこいつの反応はむしろすごい。

「お前、何も覚えていないのか？」

新しい仲間（後書き）

時間軸は、ボウケンジャー最終回から数年後。映士以外は、現役を引退してサポートに回っています。映士は、アシユの血のせい
かほとんど年をとっていない。そのために表には出ていません。

話の設定上ボウケンジャーが次世代に移っています。そして、
悪役になります。ですが、あくまでもそれは次世代がです。

記憶喪失

「お前、何も覚えてないのか？」

克己の言葉に、彼はこくりと頷いた。その表情は、迷子の子供にも似ていた。

記憶喪失か。あの時点で既になかったのか、それとも死んだショックか

「何かひとつでもいい、覚えていることはないか？」

それに、彼は首を横に振るだけだったが、思いついたように服に手をやり何かを探し始めた。

そして、何かを見つけるとそれを克己に手渡した。

「これは、身分証か？」

それは確かに身分証だった。しかも、まだ新しい。

これは、都合がいいというか。だが、普通こんなもの持ち歩いているか？

身分証の名前は、芦原賢。年齢・24才、出身地は東京となっている。

「芦原賢、か。」

克己が呟くと、彼はそれが自分の名前だとわからなかったのか首を傾げた。

「お前の名前だ。年は24だそうだ」

そう言っただけで返そうとすると、紙がもう一枚あることに気づいた。

その紙には、高丘映士、シルバー、監視者、アッシュ等の文字が走り書きされていた。

その中でも赤丸で囲われた文字。仲間、もう一度というのが。

「どうかしたのか？」

彼の言葉に、克己ははっとすると何でもないと返し、今度はその紙を返した。

もう一枚の紙は隠して。

「記憶はおいおい思い出せばいい。来い、メンバーを紹介してやる」

そういって、克己は彼を連れて部屋を出た。

「何か一つでもいい、覚えていることはないか？」

克己に問いかけられても、本当に何もわからなかった。俺は、誰なのかそう考えると怖くなった。俺は何処の誰で、今まで何をしていたのか。思い出すのが怖い

でも、思い出さなくては。せめて名前だけでも

彼はそう考えると、もしかしたら何か身元が分かるものを持っているかもしれないと思い、探し始めた。そして見つけた。

あつ、あつた！これを見せれば

克己は何だというように眉と顰めながらも受け取ると、すぐにそれが何か理解した。

「これは、身分証か？」

- 身分証？そっか、よかったこれで名前とかがわかる。

克己が何か言った。人の名前だった。

誰の名前だろう？

「お前の名前だ。年は24」

俺の名前？本当に？なんだか、知らない人の名前みたいだ。

それに、年も。俺は、そんなに、そんなに？何だろう？

彼は、他に何か手がかりになるようなものはないか、克己に聞いてみようとしたが克己は何か考え込んでるように紙をじっと見つめていた。

「どうかしたのか？」

彼が尋ねると、克己は何でもないというと紙を返した。

「一体何だったんだらう？」

「記憶はおいおい思い出せばいい。来い、メンバーを紹介してやる」

その言葉に、彼は克己の後を着いて行った。

こいつに着いて行けばいい。きっと大丈夫だ。そう思った

仲間

「ここだ」

そういつて、克己はドアを開けた。中には男が2人。

1人は、頭にバンダナを付けた体格のいい男。もう一人は同じく体格のいい顎髭の男。どちらも、克己と同じジャケットを着ている。

「あら、克己ちゃん。後ろの子は誰？結構いい男じゃない」

顎髭の男はオカマのようだ。男は近づくと、まじまじと彼を見た。

「下がれ、今紹介する。お前もこっちに来い」

克己は、そういつて中に入ると椅子に座り彼も呼んだ。彼は言われたとおりに、隣の席に腰を折らした。それを見て、2人も向かい合うように席に着いた。

「それで、その子は誰なの？新しい仲間が来るなんて聞いてないわよ？」

「そうだけ。それに、見たところそんな強そうじゃねえしな」

2人の言葉に、彼は首を傾げた。意味が分かっていないようだった。

「克己ちゃん、もしかしてただけどこの子にちゃんとあたしたちのこと説明してないんじゃない？」

「NEVERになったことは話したが」

「って、それだけかよ！俺達が一体どういうことしてるのかは一切なしかよ!？」

克己の言葉に、バンドナの男は思いっきり突っ込んだ。顎髭の男も、あらあらと言いたそうな顔をした。

「説明するなら一辺にしたほうが面倒が少ない。わかったらさっさと名前でも教えてやれ。混乱しているだろうが」

克己の言葉に、2人が彼の方を見ると彼はどうすればいいのかと3人を見ていた。

「そのほうがよさそうね。あたし達NEVERは傭兵部隊、依頼があればどんなところにも行って戦うい殺すそれがあたし達なの。あたしはNEVERの紅一点、泉京水。武器はこの鞭よ。どんな相手でも、締め付けてア・ゲ・ル。あなたもどう？」

そういつて、京水はウイंकを投げた。彼はそれには、思わず苦笑いしてしまった。

「俺は堂本剛剛三。武器はこの棍棒だ。どんなものでもぶっ壊してやるぜ」

剛三は棍棒を振り回した。棍棒は周りのものを破壊しそうな勢

いで、ぶんぶんと回っている。

「ちょっと、危ないじゃない。やめてよね」

京水の言葉に、剛三は回すのを止めると彼に名前はと尋ねた。それに、彼はどうしようかと思った。どうしても、さっきの名前が自分のものだとは思えなかった。

・さっきの名前。あれが俺の名前なんだろうけど、あんまり名乗りたくはないな。けど、名乗らないわけにはいかないからな。

「俺は、芦原賢。だと、思う」

「思いつて、どういこと？」

彼の言葉に、京水と剛三は首を傾げた。普通自分の名前に疑問形をつけるやつはいない。

「そいつは、どうやら記憶喪失らしい。名前もそいつがたまたま身分証を持っていたからわかったんだ」

「それじゃ、こいつ何もわからないのか？自分のことかも？」

そうだと、克己が答えると剛三は、まじかよ、と額に手を当て天井を仰いだ。

「克己ちゃんは何か知らないの？あなたが選んだんでしょ」

それに、克己は首を横に振った。

「今回は違う。散歩していたら、偶然こいつがドンパチやらかしている音がしてな、行ってみたら死んでいたってわけだ」

「じゃあ、こいつが強いのか弱いのかは分からないってことか」

「だが、こいつの周りの奴らは全滅していた。それも、胸を一撃でな」

「じゃあ、遠距離の攻撃が出来るのね。あたし達はみんな近距離戦闘が主だから、丁度いいわね」

京水は手を合わせて、嬉しそうに彼を見た。

「これから仲良くしましょうね」

そういって、京水は彼の手を取った。だが、それに剛三は待ったをかけた。

「俺は認めないぜ。実力もわからない、何者かもわからないそんな奴仲間にするなんてお断りだ」

剛三は、そういって彼を睨みつけた。

「こんな弱そうな奴が、仲間になるだと。足手まといになるだけだろ」

それに、克己は何か考えていたが、ならつと、口を開いた。

「お前と賢が戦って、勝てば戦闘に参加させる。負ければ、サポートに回す。それでいいな？」

「てっ、結局仲間になるのは決定事項かよ」

「当たり前だ、もうこいつはNECRO・OVERなんだから」

場所を変えるぞ、と克己が行って彼らは訓練場へと移した。

勝負

「ルールは簡単、相手が参ったというか、気絶させるかしたほうが勝ちだ。武器はここに在るものなら、何でもいい。勿論素手でもいい。時間制限はなしだ」

広い訓練場の真ん中で、彼と剛三は向き合った。剛三が持つのは、愛用の棍棒。彼が持つのは、同じく棍棒だが剛三よりも30%は長い。そして、腰には拳銃を下げている。

「それじゃあ、勝負開始よ!」

京水が言葉と共に鞭を床に叩きつけると、それを合図に戦いが始まった。

「ねえ、克己ちゃんはどっちが勝つと思う?」

「そうだな。賢だろうな」

克己の言葉に、京水はえっと、驚いたように2人を見つめた。

剛三は、棍棒で叩き潰さんとばかりに攻撃している。それは力任せに振り回している感が否めないが、その一撃は壁さえも破壊する。

彼は、それを避ける。無理もない。当たればNEVERといえど只では済まない。だが、何かタイミングを計っているようにも見える。

勢いと破壊力はあるが、スピードはそれほどでもないな。離れるより、一度懐に潜り込むか

「あの子、どうして距離をとらないのかしら？銃を持っているだから、遠距離から攻撃すればいいのに」

そんなこともわからないほど、素人なのかしら。それとも、銃の腕に自信がないのかしら？

京水がそんなことを思っていると、今まで避けるだけだった彼が動いた。

彼は、剛三が棍棒を振り上げた瞬間、一気に身体を低くして懐に潜り込む。

そして、下から突き上げるように

「そこまでだ！！」

克己の声が響き渡った。

剛三は棍棒を振り上げた態勢で、彼は剛三の首に棍棒を当たる寸前で止めていた。

克己の声に2人は構えをとく。剛三は、冷や汗をかいていた。

なんだよ、こいつ。銃メインかと思ったら、本当は接近戦かよ

あら、なかなかやるじゃない。力は剛三の方が上だけど、ス

ピードは賢ちゃんの方が上ね

「やはりな。構え方からして只者じゃないとは思っていたが、戦いなれてる。それも、実践、命のやり取りをだ。」

3人がそれぞれ心内で思っていると、彼は手に持った棍棒を軽く振っていた。

「傭兵ってこんなもんなのか？あの剛三つてやつ、振りは大振りだし、ただ力任せに殴り付けてるだけじゃねえか」

「ねえ、賢ちゃん。あたしも勝負してみない？」

京水が、唐突にそんなことを言った。

「なんだ、まだ信用出来ないのか」

「そうじゃないのよ。ただ、あの戦いを見たらあたしも勝負してみたくなったのよ」

いいでしょ、克己ちゃんと言って京水は訊ねた。

「勝負するのはかまわないが、賢おまえはどうだ？」

「かまわない。ルールはこのままで？」

それに、克己は少し考えると変更だと言った。

「接近戦は見せてもらったからな、次は遠距離での戦いを見せてもらおう」

彼は頷くと、棍棒を置いて最初の位置へとついた。

「言っておくけど、手加減はしないわよ」

京水が笑みを浮かべながら言うと、彼は先ほど同じく、何も言わずに相手を見据えた。

「始め!!」

克己の合図で、2人は動いた。

「いくわよ!」

京水は鞭を唸らせ、彼に襲いかかった。

彼は、開始と共に後ろ、鞭の射程範囲外へと飛びすさっていたので攻撃は当たらなかった。

やっぱり速いわね。開始と同時にあたしの射程圏外に逃げたなんて、武器を見せたのは自己紹介の一回だけ。あの時に見切ったのね。

「おい、克己。お前はどっちが勝つと思うんだ」

剛三が、彼を睨みながら克己に訪ねた。

「決まってるだろ。賢だ」

「何で、あいつなんだよ」

「おまえこそ、何が気に入らないんだ？」

剛三が舌打ちしながらいうと、克己がそう訊ねた。

「あいつ、会ってからずっと無表情だろ」

そういって、剛三は彼を見た。彼は、京水の攻撃をすべて紙一重で躲していた。鞭は手元よりも先の方が速い。それは、音速を超えるほどに。なのに、彼は余裕そのものだった。

「あいつ、ほんとに人間なのかよ。あれなら、人形って言った方がまだ信じられるぜ」

・確かに。あいつは、部屋に入ってからほとんど表情を変えていない。それは、記憶を失っているからだけとも言い切れんな

「それで、他にも理由があるんだろ？」

「お前が止めなければ、完全に俺を殺る気だった」

剛三は、苦虫をかみしめながらもそういった。確かに、克己が止めなければ彼の武器は確実に剛三の喉を突き破っていた。

「ありゃあ、完全に獲物を狩る動物の眼だぜ。それも、突然変わるんだ」

それは、克己も思っていたことだった。彼の思考は突然変わる。

・剛三の言うとうりだ。最初に賢があいつを見ていた眼は、観

察するようなものだった。

そして、いきなり狩人の眼に。その間には、一切の感情も思考もない。まるで、スイッチを切り替えたようだ

「だが、そんなのは関係ない。あいつはN C R O O V E R、だ」

それに、剛三は舌打ちをひとつすると2人に視線を戻した。

「なかなか素早いじゃない！でも、逃げてばかりじゃあたしは倒せないわよ！！」

彼は、その言葉には何も答えることは無くただ避け続けた。

そして・・・

「きゃあっ!?!?」

彼は何の躊躇いもなく、京水の手元を打ち抜いた。

「くっ、やるじゃない。でも、鞭を弾き飛ばしたくらいじゃあ……」

京水が打ち抜かれた手を抑えながら言うが、言い切るまでもなく更なる追撃が来た。それは寸分の狂いもなく、京水の心臓を狙っている。

「ちよつ、ちよつと少しは話す時間位」

京水は必至で避ける。鞭を拾いに行く間もないほどだ。

くつ、なかなかいい腕じゃない。けど、あんまり精確すぎる
とどこを狙っているかは、

そこまで考えて、京水は、そして、剛三も克己も思わず目を瞠
った。

彼は、笑っていた。それは、獣が獲物を追い詰めたとき、また
は狙い通りの行動をした時の笑みだった。

その笑みに、気をとられたのは一瞬。だが、彼にはその一瞬で
十分だった。

彼が放った弾は、京水の足を掠め、体勢を崩させたところで心
臓を、撃った。

「そこまでだ！」

彼は、克己が剛三に指示をだし、京水をプロフェッサー・マリ
アのもとに連れて行くよう言うのをただ見ていた。

「賢。どんな勝負に置いても手を抜かないのは良いが、何も止めを刺す必要はない。いくら死なないと言っても、痛みはある。それにあいつらは、おまえと同じ俺の仲間だ。敵じゃない」

「そう、京水と剛三は敵じゃない。だが、こいつがあいつらを見る目は、まるで敵を見ているようだ」

「敵じゃ、ない」

克己の言葉に、彼は確かめるように呟いた。俯き加減で表情はあまり見ることは出来なかったが、その表情は悲しげだった。

「あの表情、あいつ仲間になんか嫌な記憶でもあるのか？」

「そうだ、敵じゃない。仲間だ。」

もう一度、言い聞かせるようにいうと彼の表情は少し明るくなり、コクリと頷いた。

「……すまない」

「謝るなら、俺じゃなくあいつらに、だ」

彼は、それに頷くと部屋を出て行った。

「敵じゃ、ない」

敵じゃない、仲間。俺は、あいつらを信じていいのか？信じて、裏切られたりしないのか？

そう思い、彼は俯いてしまった。何故かは知らない、だが仲間という言葉を聞いて、彼は怖くなった。それと同時に、懐かしさと悲しさも。

「そうだ、敵じゃない。仲間だ。」

克己がもう一度言い聞かせるように言うと、彼は嬉しくなった。克己が言うと、信じてみてもいいかもしれない、信じようという気になった。

・どうしてだろう、こいつの言葉を聞いているとなんだか懐かしい気がする。何か思い出せそうだ。でも、そうだよな。仲間なら、傷付けちゃだめだよな。お互い助け合わないと。謝ろう

「……すまない」

「謝るなら、俺じゃなくあいつらに、だ」

・そうか、そうだよな。なら、早く謝らないと

彼はそう思って、部屋を出て行った。早く2人に謝らないと、とそれだけを思って。

謝罪（前書き）

投稿順が間違っていたので訂正します。

謝罪

マリアが京水の治療を終え、廊下を歩いていると誰かが歩いてくるのに気が付いた。

「あれは、賢？」

彼は、キヨロキヨロと辺りを見回し何かを探しているようだった。

何を探しているのかしら？

そう思い、彼女が声を掛けようとするとその前に、彼がこちらに気づき近づいてきた。

「どうかしたの？」

「あいつらは、大丈夫なのか？」

「あいつら？」

彼は、不安そうに彼女に訊ねた。

「ああ、京水のこと？大丈夫よ。心配なら様子を見てきたらいいわ。剛三と一緒にあの部屋にいるわ」

マリアは、今自分が出てきた部屋を指差した。それに、彼は礼を言つと急ぎ足でその方へ向かった。

・あの2人のことが心配で早く謝りたいって感じね。あの子が怪我をさせたって聞いたけど、悪い子じゃなさそうね。真剣にやりすぎるのかしら？

マリアは、そんなことを思いながら彼の消えた方を見ていた。

・失敗した。せめて大体の場所を聞いてくるんだった

彼は、そう思いながら部屋をひとつひとつ確認していた。

・どうする、一度戻るか？

そう思い、彼は踵を返そうとして気づいた。ここは、どこなのかと。

・もしかして、迷った、か？

そう考えて、どうしようかと立ち止まったがすぐにまた部屋を探し出した。

・順番に確認していけば、たぶんなんとかなるだろ

そうして、しばらく探していると人の気配を感じそこに行くと、そこにはプロフェッサー・マリアがいた。

「どうかしたの？」

彼女は不思議そうに彼に訊ねた。

- よかった。これで、あいつらの場所がわかる

彼は、そう思って安心した。知らない場所で、人も見つからない。その状況は、やはり彼にとって不安でしかなかった。心内で、いくら平気なことを思っても。

「あいつらは、大丈夫なのか？」

「あいつら？」

マリアに会ったことで安心したが、同時に2人のことが心配になった。

- 京水とかいうの、生きてる、よな。もしかして、死んでいないよな？

「ああ、京水のこと？大丈夫よ。心配なら様子を見てきたらいいわ。剛三と一緒にあの部屋にいるわ」

それに、彼はほっとした。

- よかった。生きてる

彼はマリアに頭を下げると、すぐに彼女が指した部屋へと向かった。

部屋の前まで来た彼は、少しためらった後意を決して扉を開けた。

「てめえ、何しにきやがった」

気づいた剛三が、すぐに彼を睨みつけた。それに少しひるみながらも、彼はどう切り出そうかと考えていた。

「怒ってる、よな。そうだよな。どうしよう、謝りたい。けど、言っても聞いてくれなさそうだし。言い訳にしかないなら、よな。」

「おい、なんとか言ったらどうだよ」

いつまでたっても何も言わない彼に、剛三はイラつきながら言った。

「たく、なんなんだよこいつ。入ってきたと思ったら、何も言わないで突っ立てやがるし。嫌味ならとっとと帰れってんだ」

「……………ま……………い」

剛三が、無言の彼にしびれを切らし襟首を掴もうとしたとき、彼が何かを呟いているのが聞こえた。

「ああ？なんだった」

「賢ちゃん？」

剛三だけじゃなく、京水までも聞き返す。それに彼は、覚悟を決めたかのように頭を下げた。

「すまない！その、俺のせいで、お前たちに怪我を……」

どンドン声が小さくなっていき、最後の方は何を言っているかわからなくなった。彼は、頭を上げることが出来なかった。2人がどんな顔をしているのか、見るのが嫌だった。

- やっぱり、ダメだよな。俺なんか、謝っても意味なんかないんだ。俺は、だから

彼がそんなことを思っているとき。2人は何も言わなかった。いや、言えなかった。いきなり、頭を下げた彼に驚いていた。

なんだよ、こいつ。急に入ってきて、嫌味のひとつでも言うのかと思えばいきなり謝って黙んまりだし。これじゃ俺がいじめてるみたいじゃねえか

- 賢ちゃん、ずいぶんと気にしてたのね。熱くなりすぎて我を忘れるってタイプ、なわけないわよね。本気でやりすぎて、後で後悔するタイプね

「おい、てめえ。いつまで頭下げてんだよ。いいかげんあげやがれ」

なんとはなしに続いた沈黙に耐えられなくなったのか、剛三が怒鳴るようにそう言った。

「すまない」

だが、彼は頭を上げずにそう繰り返した。それに剛三は、彼の胸倉を掴み無理やり顔を上げさせた。

「てめえ、それは嫌味かよ。謝罪なんて、一回聞けば十分なんだよ。何度も、言う必要なんてないんだよ。第一、てめえは何に對して謝ってんだよ」

そう言つて、剛三は彼を突き飛ばした。彼はその勢いで扉に打ちつき、また下を向いてしまった。それに、剛三はひとつ舌打ちをするとそっぽを向いてしまった。

「ちよつと、剛三。いいすぎよ」

京水が咎めるように言うが、剛三は目を合わせようとしなかった。それに、京水は溜息を吐くと、彼に向かって話し始めた。

「ねえ、賢ちゃん。あなたは何に對して謝っているの？もし、ただ言っているだけならもう言わなくていいわ。迷惑なだけだから」

それに、彼は何か言おうとしたがまた俯いてしまった。その時、一瞬彼の

瞳に光るものが見えた気がした。

「そっか、やっぱり迷惑だよな。俺は、ば…も…だし」

「でも、違つのなら理由を言つてほしいの。理由もなしに言われたんじゃ、あたし達も困るから、ね？」

その言葉に、彼は思わず顔を上げた。その表情は驚きに彩られ、何故、どうしてといつていた。

それに、京水は苦笑すると、ほらつと剛三の頭を叩いた。

「ちっ、聞いてやらないこともない。だから、とつとと話せ」

剛三も、いまだ不機嫌ではあるがしっかりと彼に目を向けてそう言った。

「言ってもいいのか？」

「だから、良いって言ってんだろ。早くしろ」

「聞いてくれる、俺の話。嬉しい」

彼は、頷くと涙をこらえながらぼつりぼつりと理由を話し始めた。

「克己は、俺もお前達の仲間だと言っていた。仲間っていうのは、お互いに支えあい、助け合うものだろ。お前たちは敵じゃない仲間だ。なのに！俺は、お前たちを殺そうとした。いや、殺した！いくら死なないと言っても、一度殺したんだ！折角、折角また仲間が出来たのに。俺を仲間だと人間だと言ってくれる人に会えたのに」

彼はこらえきれないかのように涙を流した。声は出さずに、ただ泣いていた。

京水は、彼に近づくと手を伸ばした。彼は、びくりと身をすく

ませるが京水は構わず彼の頭を撫でた。それは、子供をなだめるような優しいものだった。

「泣かないで、賢ちゃん。あたしは別に気にしてないわ。あたしはNEVERよ、死者なの。だから、殺したなんて思わなくていいわ。それに、あたしは嬉しいの」

「嬉しい？」

「そうよ。あなたはあたし達を仲間だと思ってくれていた。そして、心配してくれていた。それだけで嬉しい。あたしは、あなたを仲間だと認めるわ」

それを今まで黙ってみていた剛三は、けつと吐き捨てると自分も彼に近づきその背中をばしばしと叩いた。

「いつまでも泣いてんじゃねえよ。その、俺も言い過ぎた。悪かったよ。お前にもいろいろあるのに。ほら、俺よりも強いんだから泣きやめよ」

「それって……」

「だから、俺もお前を仲間だって認めてやるって言うてんだよ。俺よりも強いのは確かなんだからな」

2人の言葉に、彼は頷いたが涙が止まらず。しばらくの間泣き続けた。その間、京水は優しく頭を撫で、剛三は悪態をつきながらも彼を慰めていた。

- たく、面倒な奴らだ。けど、これで蟠りは消えたな。

部屋の外、その扉に寄り掛かるようにして克己が中の様子を窺っていた。彼は、3人の様子が気になって見に来たのだが、それは杞憂だった。

- まあ、後はあいつらしだいだな。

克己は口元に微笑を浮かべると、そこを後にした。扉の向こうでは、まだ2人が彼を宥める声が聞こえていた。

「ねえ、葉くん。映土くん見つかった？」

ボウケンジャーのメンバーが集まるサロン。黄色いジャケットを着た少女が、赤いジャケットを着た青年に訊ねた。

「いや、まだまだ。だが、あいつ1人でそう遠くまで逃げられるはずはない」

彼は、首を横に振るがすぐにそう言い切った。その声音には、怒りが滲んでいた。

「葉の言うとおりだよ、神無ちゃん。あいつは裏切り者で犯罪者、どこにも行くあてなんてないだから。それに、化け物だしね」

青いジャケットの青年が、楽しそうに言った。

「それに、どこに身をひそめていても春樹に見つけられない者はないさ」

黒いジャケットで青のジャケットの青年と同じ顔をした青年が、彼を見ながらいった。

「もちろんさ。その時は、冬樹も手伝ってよ。俺は荒事は苦手だし」

彼らがそう言って笑い合っていると、今まで我関せずといった

様子でコーヒを飲んでいた桃色のジャケットを着た女性が口を開いた。

「みなさん、おしゃべりは結構ですがやるべきことはやってください。私は手伝いませんから」

「うわ、相変わらず秋乃さん冷たいね」

神無はそういつて、彼女を指差した。

「でも、あいつを見つげ出すのも今の任務と並行してやってくれないかな」

サロンの扉が開き、14、5歳の少年が入ってきた。

「別に、優先する事柄でもないんじゃないのか？あいつがいなくても、困ることなんてないし。まあ、弾除けがいなくなったのは惜しいけどな」

「それに、モルモットもね」

冬樹と春樹が笑いながらそういつが、彼は首を横に振った。

「それがそうもいなくてね。あいつは見た目だけなら人間だからね。訴えられでもしたらサージエスの信用問題にかかわる」

「レオくんて心配性だね。そんなの秋乃さんがどうにかしてくれるよ」

ね、つと神無が秋乃に同意を求めるように言つと、彼女もまた

頷いた。

「東之宮家の力を使えば、どうということはありません」

「そっちはね。でも、マスコミになんて情報を流されたらまったもんじゃない。それに、あいつそのものがうちの機密そのものだしね。他のやつらに獲られる前に見つけ出してもらいたい。見つけ出したら、好きにしていいいから」

その口調こそ軽いものだったが、それは命令だった。

「了解した。好きにしていいいと言ったが、どれくらいまでだ？」

「もちろん、死ななければ何をしてもいいよ」

葉の質問に、レオは笑顔で言い切った。死ななければ、拷問でも人体実験でも、武器の練習台でも、慰み物でも、と。

「ちようどいいや、面白い薬が手に入ったんだ。早く試してみたかったんだ」

「へー、面白そうだな。俺も混ぜろよ」

「あたしも、試してみたい技があるんだ。」

彼らは楽しそうにそう言った。それは、子供がおもちゃで遊ぶように。

「ですが、あれがいなくなつて戦闘に支障が出ています。A・SSSのこともありますし、どうしますか？」

秋乃がそういうと、みんなはそれぞれ考え込んだ。戦闘はできないわけじゃない、それどころか自信はある。だが、そんな面倒なことはしたくない。

「そうだ。最近裏の情報で、面白い組織を見つけたんだ」

「面白いもの？」

春樹は頷くと、説明を始めた。

「うん。その組織はNEVERといってね、戦闘のプロ。傭兵部隊だそうだよ。それも精鋭のみを集めた組織で、人数は片手の指で足りるくらいしかない。ね、都合がいいと思わない？」

「そうだね。邪魔になったらいつでも消せる。うん、いいよ。

そいつらを使おう」

レオが許可を出したことで、彼らに依頼することに決まった。

「じゃあ、早速連絡をとるね」

そういって、春樹はパソコンをいじりだした。

「これで、問題のひとつは解決だ」

「あいつの方もさっさと済ませないとな」

「ほんと、裏切るなんて許せないんだから」

「きつちり罰を与えないといけませんね」

「僕の方もちゃんと残しといてよ」

そう言っつて、彼らは笑いあつた。

悪夢

何処とも知れない暗闇の中。そこに、彼はぼつんと立っていた。

「ここは、何処だ？何故、俺はこんな処に」

彼は不思議そうに周りを見回すが、闇以外は存在していなかった。いや、例えあつたとしてもこれでは判らないだろう。

そうしているうちに、どこからか声が聞こえた。姿は見えないが、自分の直ぐ近くから聞こえるような気がした。

「…あれが半分」 「…ってガキか……」

「お前の母親は」 「」。 「の血を増やす為にお前の父親と結婚した！」

声は、自分に向けて話しているが、所々が抜け落ちて聞こえなかった。どうしてもだかはわからない、けどそれが大事なことのようない気が彼にはした。

「よく聞け、」 「！母さんは確かに」 「だが、俺は真剣に愛した！母さんだって心から俺を…お前を……！！」

今度は別の声が、訴えるように、言い聞かせるように語りかける。これは、父親？

「」。 「お前に仲間が助けられるのか？今度も自分の」

『を押さえられるとは限らないぜ。お前のせいで彼奴らが死ぬかもな…』
『を死なせたようにな！』

また、最初の声が言う。こいつは、俺を嘲っている。でも、それだけじゃないような。でも、死なせたって。俺は、誰を死なせたんだ？それに、仲間って？克己たちの前にも、誰かいた？

『が。』
『がお前の錫杖を分析して、同じ力をこの』
『に持たせた。これがあればお前は』
『になる事はない』

最初のやつとも、父親と思う声とも違う声。こいつは一体？こいつが仲間、なのか？それに、錫杖って。俺は何になるんだ？

『お前の使命はなんだ！お前の使命は』
『と戦うこと』
『お前はそう言った。』

『お前は自分の中の』
『の血を憎んでいるんだ。その激しい憎しみが、お前の心が』
『の血を目覚めさせるんだ』

使命。俺は、何かと戦っていた？何と？それに、憎んでいるって。俺は何を憎んでいたんだ。俺の中にある血って、どういうことだ？

『その人類とやらが、そんなに偉いのでござるか！？』
『殿だけは拙者を理解しようとしてくれた…』

また違う声。理解する？俺が？それに、こいつは何を哀しんでいるんだ？どうして俺なんかそんなことを言うんだ？

- お前こそ、ケイが残した唯一の穢れ。お前を生んだせいで、ケイの魂は百鬼界にも行けず次元の狭間で苦しんでいる

ケイ？誰だ？その人は俺の何なんだ。でも、その名を聞くと温かい気持ちになる。けど、苦しい。何でだ？

その声を最後に、もう何も聞こえなくなった。何だったんだ、あの声は。あいつらは言いたいなんなんだ。俺の何なんだよ。誰か、教えてくれよ。

どれくらいたったのかはわからない。彼が立ち尽くしているとまた声が聞こえてきた。けれど、それは今までの声とは違いとても小さくともすれば聞き逃してしまいそうだ。

「何だ、誰かが泣いている、のか？」

そう、暗闇の中誰かが泣いている。姿は見えない、だが子供の声のような気がする。

- ねえ、どうして？どうしてなの？何で、こんなくらいなの？せっかく、光を掴めたのに。どこから間違えたの？

その声は、どんどん近くなっていった。それとともに、遠くの方で光が見える。白い光。それは、徐々に形を変えていく。

- 僕が『 』だったから？それとも、人を求めたから？僕は、友達が、仲間が欲しかっただけなのに。それが、いけないことだったの？何がきっかけだったの？なんで、僕はただ、皆と一緒に居たかっただけなのに。

そうして、その光は少年のような形を……。

「賢ちゃん！ねえ、大丈夫。しっかりして！！」

「うっ、」

突然なにかに揺らされ、彼の意識は覚醒した。はっきりとした目を開き正面を見ると、そこには安心した表情の京水。隣には剛三が、少し離れたところには克己もプロフェッサー・マリアもいる。

「よかった、目を覚ましたのね。どこか、痛いところはある？」

彼は暫くぼーっとしていたが、京水の言葉に首を横に振った。

「そう、でも念のため検査したほうが良いわ。京水、少し場所を貸してくれるかしら」

マリアがそういって、彼に近づこうとすると剛三が遮るように間に立った。

「何のつもり？」

「今、あんたを賢に近づかせるわけにはいかない」

そう言って、2人はにらみ合った。彼は、2人が何故そんなことになっているのかわからない。だが、自分が原因だということだ

けは分かる。

「ねえ、賢ちゃん。倒れる前の事、憶えてる？」

- 倒れる前？わからない。というか、俺は倒れたのか？

「その様子じゃあ、憶えてないみたいね」

そう言っつて溜め息をひとつ吐くと、京水は説明を始めた。

「プロフェッサー・マリアが細胞維持酵素を投与しようとしたら、いきなり怯えて暴れ始めたのよ。あたし達も止めようとしたけど無理で、彼女が睡眠薬や安定剤を打とうとしたら更に怯えて、そのまま気絶しちゃったのよ」

- だから、剛三はプロフェッサーをこっちに来させないようにしてくれてるのか

彼がそう思っていると、京水は手首を擦りながらそこを見た。そこには白い包帯が巻かれている。

NEVERである自分達は、たとえ傷を負ってもすぐに癒える。それは、致命傷でも同じ。最初の時、京水の傷がすぐに癒えなかった方がおかしいのだ。

「それは、俺がやったのか？」

彼がそう尋ねると、京水は擦っていた手を止め包帯を隠した。その行動を見て、彼は確信した。自分がやったのだと。

！
- お前のせいで彼奴らが死ぬかもな…父親を死なせたようにな

彼の耳に、先ほどの言葉のひとつが甦った。今度は、抜け落ちていた部分もはつきりと。

彼は、体を起こし立ち上がるうとした。だが、それは京水に止められた。

「ちよつと、まだ寝てなきゃだめよ。あなたは倒れたのよ」

「平気だ。放せ」

そういつて、どうにかベッドから降りようとするが、力は京水の方が上。結局は抑え込まれてしまった。

「お前は何処に行こうとしているんだ」

今まで見ていただけだった克己が、彼に向けて言った。それに、まだ言い合いを続けていた剛三とマリア、そして京水と彼も目を向けた。

「お前は記憶がないんだろう。ここを出て行っていく場所があるのか？それとも、何か思い出したのか？」

「……ここを出ていくとは言ってない」

少しの沈黙の後、彼がそういつと克己はそうか、とだけ言った。京水と剛三はほつとしたような顔をしていた。

俺には、行く場所なんてない。でも、ここにもそう長くはいられない。3人は俺を心配してくれている。それはうれしい。でも、俺もみんなが傷つくのは見たくない

「賢。何か悩み事があるのなら言え。1人で抱え込むな。言っただけだ、俺達は仲間だと。もし、お前が記憶を取り戻したいのなら協力してやるし、そのままでもいいのならそう接する。今回のようなことがあればフォローしてやる。だから、言え。そうじゃなければわからない」

克己の言葉に、彼は胸の中が温かくなるような気がした。

でも、俺は父親を殺した。俺のせいで死なせた。だから、もしかしたらこいつらのことも

「賢ちゃん、克己ちゃんの言うとうりよ。話してくれないかしら。あたしも、力になりたいの」

「酔素を打つたんびに暴れられちゃ敵わねえからな。聞いてやるよ」

こいつらは、俺の話を聞いてくれる。でも、いいのか？夢のことを話したら、こいつらもあいつらと同じく。それに

「賢。俺達を信じろ」

迷っている彼に、克己はまっすぐに目を見て言った。彼は、それを見てやはりこいつには敵わないと思いい口を開いた。

「わかった。けど、プロフェッサーは席を外してくれないか」

「私が信じられないというの？」

プロフェッサーの言葉に、彼はそうじゃないと言って言葉を探した。そんな様子を見て、彼女はひとつ溜息を吐くと分かったと言っ
て立ち上がった。

「私は研究所に戻るわ。何かあったらすぐに呼びなさい」

そう言っ
て、彼女は部屋を後にした。完全に部屋から離れたことを確認した彼は、知らず詰めていた息を吐きだし、話始め。

「俺のせいで、父親は死んだ。だから、お前たちも死ぬかもしれない。そう思ったから」

「出ていこうとしたのか」

克己の言葉に、彼は俯きながらも頷いた。それに、克己は大きく溜息を吐くと彼に向かって言った。

「お前は馬鹿か。最初に言ったはずだ、俺達は死者だと。すでに死んでいる俺達に、死なせるかもしれないとか、死ぬとか関係ない。それに、見縊るなよ。お前にやられるほど、俺達は弱くはない。お前が俺達を殺すのなら止めるし、お前を狙っている奴らがいるなら俺達も手を貸す。お前の敵は俺の敵だ」

克己の言葉に、京水も剛三も頷いた。それに、彼はまた嬉しくなった。

「どうしてなんだ。こいつらは俺が一番欲しい言葉をくれる

「ありがとう」

彼はたまらずに、そう呟いた。そのまま沈黙が続いたが、それは嫌なものではなかった。

「そういえば賢ちゃん、さっき自分が父親を殺したって言ったけど。記憶、戻ったの」

京水が思い出したようにそう言うと、剛三もそういえばというような顔をして首を傾げた。克己も、答えを待っているらしくじつと彼を見つめている。

「戻ってはいない。けど、気を失っているとき夢を見ていた。そこは暗い闇の中で、何も見えなかった。誰もいなかった。ただ、声が聞こえた。声の主は一人じゃなかった。俺が父親を殺したと言った声に、父親と思しき声。俺に向かって、何か必死に訴える声、人類を憎みながらも、俺に自分を理解してくれたと言っていた声。そして、俺を穢れだという声。どの声も、途中言葉の一部が抜け落ちている聞こえなかった」

「他には、何か聞こえたか？」

「最後に、子供の泣いている声が聞こえた。こいつの声だけは小さくてもはっきり聞こえた。どうしてなの？何で、こんなくらいなの？せつかく、光を掴めたのに。どこから間違えたの？僕が」

『だったから？僕は、友達が、仲間が欲しかっただけなのに。何がきつかけだったの？なんで、僕はただ、皆と一緒に居たかっただけなのに。』と言っていた」

部屋にまた沈黙が下りた。だが、さっきとは違う。重いものだった。

「なあ、そいつは一体何なんだ？そいつは自分が一体何だと言おうとしたんだ？」

剛三が尋ねるが、彼は口を横に振るだけ。誰も答えを持っていない。

「そいつが誰なのか、夢の会話は一体何なのか。それはいい。だが、ひとつだけ聞くぞ。お前は記憶を取り戻したいか」

克己がそういうと、彼は考え込んだ。

・記憶を取り戻す、か。気にはなる、だが怖い。俺が何なのか、知っては戻れなくなるような気がする。せつかく見つけた、この場所に。温かいこの場所に

「いや、いい。夢は気になるが、時が来れば自然と思い出すだろ」

そう言っつて、彼は気分が悪いと言って自分の部屋に行ってしまった。

彼がいなくなった後、彼らは黙っていたが。彼らは引き留める

ことはしなかった。

「おい、剛三。お前はこれを調べる」

そう言つて、克己は剛三に一枚の紙を渡した。それは、克己が最初に彼と会つたときに身分証と一緒に渡されて、返さずに隠し持つたものだった。

「何だよこれ？」

「それは、賢が身分証と一緒に持っていたものだ。それに書いてある、高丘映士。それを調べておけ」

「克己ちゃん。あたしは？」

「お前は芦原賢という人物が存在するのかを調べる。俺は身分証の住所を調べる」

そう言つて、一人ひとりに指示を出した。

「けどよ、あいつは別にいいって言つてたじゃねえか」

「念のためだ。もしかしたら、あいつを狙っているやつがいるかもしれないからな」

「そうね。それに、いろいろはつきりさせて安心させてあげたいものね。自分がちゃんとここについていいんだってね」

「ちっ、しゃあねえな」

そうやって、3人はそれぞれのもを持って部屋を後にした。

依頼

「ねえ、克己ちゃん。賢ちゃんについて何かわかった？」

パソコンに向かっていている克己に、持っていたコーヒを渡しながら京水が尋ねた。だが、彼は首を横に振る。

「だめだ。身分証の住所を調べてみたが、だれも住んでいない。お前の方はどうだ？」

「こつちもお手上げよ。いろいろ調べてみたけど、芦原賢なんて存在しなかったわ」

そう言って、彼はため息を吐いた。

「本当に、あいつ何者なんだろうな」

剛三が、椅子をくるくると回しながら呟いた。

今この部屋には、彼を除いた3人がいた。3人は、どうにかして彼の身元を調べていたが、何もわからない。

「でもよ、調べる必要なんてあのか？別に、悪い奴じゃねえんだし」

「確かにそうだけど、何かわかれば記憶を取り戻す手がかりにはなるでしょ？それに、言っただじやない。人として、見てくれる人に会えたのにつて。きっと、無意識に過去に囚われているのよ。」

何とかしてあげたいじゃない」

そう言っつて、彼はまたパソコンに向き直った。確かに、それは言葉には出さなくても2人も同じだった。NEVERとなったからには、仲間であり家族も同然。そんな彼が、無意識とはいえ過去に囚われ距離をとっている。となれば、力になるうとするのは当たり前だ。

「そう言えば、もうひとつの方はどうだ？」

「高丘映土のことか？あれなら見つかったぜ」

剛三はそう言いながら、克己に資料を渡した。

「高丘映土、SGSのレスキュー部隊所属。29歳、独身。家族構成、父母ともに死亡。SGS所属前は、稼業をしていたがそれが廃業になったとき、スカウトされた」

克己が資料を読み上げる。京水も、手は止めずに耳だけで聞いていた。

「この、稼業というのは何かわかるか？」

「いや、それがよくわからねえんだ。ついでに言つと、親についてわからなかったぜ」

剛三がお手上げと言ったように、手をあげた。

「こいつも、か。どっちを調べても詳しいことは分からずじまい。どんな、関係なんだ」

「おい、こいつの写真はあるか」

剛三は首を横に振った。

「一枚もないのか？」

克己が眉を顰めながら問うと、剛三はそれにああ、と苦虫を噛み潰したように頷いた。

「それ、おかしくないかしら？」

京水が手を止めて話に入ってきた。その眉間には、しわが刻まれている。

「大体の企業っていうのはね、入社した時に社員証を作るために写真を撮るでしょ。なのに、一枚もないなんて。ありえないわ」

「となると、考えられることはふたつ。ひとつはこの資料が偽物だということ」

克己の言葉に、剛三は不機嫌そうな表情をした。その情報を手に入れたのは彼だ。偽物を掴まされたとても思ったのだろう。

「だが、こいつが偽物だとしたらもつと現実味のある情報を載せるだろう。データだけでなんて、写真もない。企業でのこと以外不明なんてあまりにもわざとらし過ぎる」

「そうね。でも、偽物だとも言い切れないわ。逆に、わざとらし過ぎるから本物って考えることも出来る。その場合は、誰かが彼

の情報を隠蔽していると考えていいわ」

そういって、京水は克己が持っていた資料を1枚1枚見ながら言った。

「隠蔽って、どういうことだよ。それ」

「そんなのわからないけど、たぶん知られたくないからよ。でも、彼については住所もはっきりしているから、直接言っただけのことでもできるわよ」

どうするの、と彼は克己に訊ねた。

・高丘映土と芦原賢。何の関係もない、ってのはないだろう。だが、果たしてこいつのことを調べるのが賢のためになるのか

「あ、そういえば。こいつ、どうやら今行方不明らしいぜ」

剛三が思い出したというように、声を上げた。

「行方不明、だと?」

「ああ、確か4日前。お前が賢を拾ってきた次の日からだ」

・これは、偶然ではすまされないな。この2人の間には、必ず何かがある

克己はそう確信すると、口を開こうとした。だが、それを遮るように、パソコンにメールが届いた。それはSGSからで、NEVERを雇いたいというものだった。

「丁度いい。おい、お前らはSGSに行つて直接情報を探つてこい。俺は賢を連れて高丘の家に行く」

「わかつたわ。じゃあ、さつさと準備するわよ」

「たく、しゃあねえな」

そうして、彼らは動き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911y/>

NEVER&NEVER ~ 永遠と永遠 ~

2011年11月21日20時55分発行